

ジャン=ジャック・ルソーとロマン主義時代の英国 小説

著者	鈴木 美津子
号	180
発行年	2001
URL	http://hdl.handle.net/10097/14496

すずき 木 美 津 子

学位の種類 博士(文学)
学位記番号 文 第 180 号
学位授与年月日 平成14年 1 月10日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 2 項該当

学位論文題目 ジャン=ジャック・ルソーとロマン主義時代の英国小説
論文審査委員 (主査)
教授 原 英 一 教授 齊 藤 征 雄
教授 中 村 捷

論文内容の要旨

18世紀後半から19世紀初頭にかけてのいわゆるロマン主義時代に活躍した英国作家たちは、社会体制、政治体制を攻撃し、個人の感情、感受性の解放等を熱狂的に説いたフランスのジャン=ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) の大変な影響下にあった。この時期に出版された英国小説には、ルソーに関する言及、特に感傷小説『ジュリ、または新エロイーズ』(*Julie, ou la nouvelle Héloïse*, 1761、以下『新エロイーズ』)と教育小説『エミール、または教育論』(*Émile, ou de l'éducation*, 1762、以下『エミール』)に関する言及やほのめかし——それは怒りに燃えた批判・反発であったり、熱狂的な賛同・支持であったりする——で満ちている。

ロマン主義時代の英国人に対するルソーの影響に関しては、これまでもつばらシェリー (Percy Bysshe Shelley)、バイロン (George Gordon Byron)、コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge)、ワーズワス (William Wordsworth)、サウジー (Robert Southey) などの詩人に限定して考察されてきた。たとえば、ジェイムズ・H・ウォーナー (James H. Warner) の『『新エロイーズ』に対する18世紀英国の反応』("Eighteenth-Century English Reactions to the *Nouvelle Héloïse*," 1937) は、18世紀英国におけるルソーの受容史を詳説した先駆的論考であり、また、エドワード・ダフィー (Edward Duffy) の『英国におけるルソー』(*Rousseau in England*, 1979) は、ロマン派の詩人たち、とくにシェリーに対するルソーの影響を跡づけた画期的な労作である。この時代の小説家に与えたルソーの影響に関しては、J. M. S. トムキンズ (J. M. S. Tompkins) やマリリン・バトラー (Marilyn Butler)、ニコラ・J・ワトソン (Nicola J. Watson)、エリナー・タイ (Eleanor Ty) などの研究書でしばしば指摘はされるものの、包括的なものとは言い難い。

本論の目的は、ルソーの影響がうかがわれるロマン主義時代の英国小説を30作あまり取り上げ、英国の作家たちがルソーにいかなる反応を示したか、いかにルソーを受容したかを分析し、さらには、ルソーに対する反応を一つの手がかりとして、この時代の錯綜する小説群にある種の見取り図を呈示することである。ちなみに、本論で取り上げた小説の大半は、現在出版されておらず、マイクロフィルムの形で大英図書館から取り寄せた。なお、本論文の研究が可能になったのは、平成9年から10年、そして平成12年から14年の2回にわたって交付された科学研究費のおかげである。ここに付記して感謝したい。

感傷小説『新エロイーズ』は、1761年2月にフランスで出版されると、2ヶ月後の4月にはウィリアム・ケンリック (William Kenrick) によって『エロイーズ、または原文のまま手を加えていない書簡集』(*Eloisa: or, a Series of Original Letters*) という題で英訳され、1800年までに10版を重ねた。また、教育小説『エミール』も出版されるや、ただちに同じくケンリックによって『エミリウス、または教育論』(*Emilius: or an Essay on Education*) という題で翻訳され、大反響を巻き起こした。

『新エロイーズ』とはいかなる作品なのか。そして当時の英国人たちはこの小説をいかなる作品と受け取ったのか。『新エロイーズ』は書簡体形式を取っており、主要な登場人物は男爵の娘ジュリ (Julie D'Étanges) と彼女の娘時代の家庭教師サン・プルー (Saint-Preux) そして彼女の夫ヴォルマル (M. de Wolmar) であり、妻と夫と妻の恋人の三角関係の物語である。美しく感受性豊かな貴族の娘ジュリと平民の青年サン・プルーが愛し合う。二人は官能的な一夜を過ごし、ジュリはサン・プルーの子供を身ごもるが、結局は流産してしまう。ジュリの父のデタンジュ男爵 (Baron d'Étanges) は身分違いを理由に結婚を許さず、二人は別れる。ジュリは父の友人で年の離れた初老のロシア貴族ヴォルマルのもとに嫁ぐ。それから6年後、夫のヴォルマルは、サン・プルーが妻のかつての愛人であることを知りつつ、息子の家庭教師として家庭内に招き入れる。かくして、ジュリ、サン・プルー、ヴォルマルの三人は、秩序と平和と無垢が支配する牧歌的なクラランで、幸福感に満ち溢れた生活を送るかに見える。しかし、実はジュリとサン・プルーの愛の炎は依然として燃え尽きることなく燦々している。ジュリは湖で溺れかかった息子を救助したことがもとで病に倒れる。彼女は死の床で、サン・プルーに対する抑えようにも抑えきれなかった愛を告白する手紙を書いて死ぬ。不義の情熱、感受性に殉じた彼女は、死後、妻として母として、美德に満ちた理想的存在として崇められる。

『新エロイーズ』は、1790年代、1800年代の英国小説に次のような知的枠組みを提供した。つまり、ジュリとサン・プルーの情熱的恋愛を通して、一組の男女が愛し合っていれば、社会の慣習、しきたり、制度に逆らってでも、二人にはその愛を成就させる権利があるということ。さらには、実際の行動がいかなるものであれ、美德に対する情熱さえあれば、また社会の不合理で不自然な規範ではなく、自然の感情、感受性、感性、衝動を自分の行動の指針にしさえすれば、社会通念上はその行動が罪に満ちた恥すべき転落に見えようとも、その行動は称賛すべきものとなるということ。すなわち、美德は人間のとる行動や行為にかかわっているのではなくて、むしろ感性、感受性、情熱にかかわっているのだ、ということ。要するに、つねに感情、感受性、衝動の方が、親の権威、国家の法律、社会のしきたり、因習的道德の上位に位置するのだという知的・思想的枠組みを呈示した。

当然のことながら、ルソーの急進主義的言説に対して当時の英国では賛否両論があった。ル

ソーに対するロマン主義時代の英国作家の反応は作家の信奉する主義、主張、性別によってかなり異なる。たとえば、トマス・ホルクロフト (Thomas Holcroft)、ウィリアム・ゴドウィン (William Godwin) などの男性の急進主義作家はルソーの主張を熱狂的に支持し、一方、保守主義者は、たとえばエドモンド・バーク (Edmund Burke) は「『エミール』は実行不可能で空想的で危険な」書と弾劾し、おしなべてルソーに対して侮蔑的・否定的な態度を示した。女性作家の場合は、『エミール』で展開される女性観・女子教育観——女性は感受性のみの存在であり、知性・理性等は欠如しているゆえ、女性には学問は不要である——に関しては、メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft) のような急進主義作家も、ハナ・モア (Hannah More) が代表する保守主義作家もきわめて批判的であった。しかし、『新エロイズ』に描かれた情熱的に初恋を貫き通す女主人公ジュリに関しては、メアリ・ヘイズ (Mary Hays) やメアリ・ウルストンクラフトのような急進主義作家は熱狂的な讃美をおくり、保守主義作家、たとえばエリザベス・ハミルトン (Elizabeth Hamilton) やハナ・モアなどは危険な兆候を嗅ぎ取り、嫌悪感をあらわにした。以下、簡単に各章の内容を要約した。

第一章 ジュリはふしだらな浮気女か、美德の鑑か——記号としての『新エロイズ』——

本章では、登場人物がルソーの『新エロイズ』を読んだり、一節を引用したり、感想を語り合ったり、議論したりしている場面が描かれている小説、さらにはジュリア (『新エロイズ』の女主人公ジュリのイギリス名) という名前の女性が登場する小説——例えば、トマス・ホルクロフトの『アナ・セント・アイブズ』 (*Anna St Ives*, 1792)、メアリ・ヘイズの『エマ・コートニーの思い出』 (*Memoirs of Emma Courtney*, 1796)、メアリ・ウルストンクラフトの『女性の虐待、またはマライア』 (*The Wrongs of Woman, or Maria*, 1798)、シドニー・オーエンソン (Sydney Owenson) の『奔放なアイルランド娘』 (*The Wild Irish Girl*, 1806)、エリザベス・ハミルトンの『現代の哲学者の思い出』 (*Memoirs of Modern Philosophers*, 1801)、アメリア・オーピー (Amelia Opie) の『アドライン・モウブレイ』 (*Adeline Mowbray*, 1804)、メアリ・ブラントン (Mary Brunton) の『自制心』 (*Self-Control*, 1810)、スーザン・フェリアー (Susan Ferrier) の『結婚』 (*Marriage*, 1818) ——を取り上げ、『新エロイズ』がロマン主義時代の英国小説においてある種の記号として機能していることを検証する。つまり、急進主義小説において、『新エロイズ』は女主人公を勇気づけ、行動の手本となり、情熱的な性行動を正当化し、感性、情熱、官能を刺激・煽る役目・機能を果たしている。換言すれば、『新エロイズ』は、当時の女性に禁じられていたより大きな性的自由への誘い、性的感情の目覚め、官能的刺激を示す記号となっている。一方、保守主義作家は、女主人公が『新エロイズ』を読み、その理論を実践することによって、破滅への道を転落するさまを描いた。その結果、『新エロイズ』は保守主義作家にとっては、不義の性的情熱と急進主義的個人主義を意味する記号となる。

第二章 感傷小説の知的枠組み——『新エロイズ』的変奏曲——

第二章では、感情・感受性を美德の導き手と見なし、主観的で自発的な感情・感受性に重要性・特権を与えた『新エロイズ』が、1790年代の英国の感傷小説——例えば、ヘレン・マライア・ウィリアムズ (Helen Maria Williams) の『ジュリア』 (*Julia, a Novel*, 1790)、シャーロット・スミス (Charlotte Smith) の『デズモンド』 (*Desmond*, 1792)、ジェイン・ウェスト (Jane West) の『現代の物語』 (*The Tale of the Times*, 1799)、チャールズ・ロイド (Charles Lloyd) の

『エドマンド・オリヴァー』(Edmund Oliver, 1798)——に、いわば知的・思想的枠組みを提供していることを実証的に跡付ける。当時の作家達は、きわめて明白な政治的メッセージを発する『新エロイズ』を自らの政治的見解を表明するために利用し、自己の信奉する主義に忠実な感傷小説を構築しようとした。急進主義小説は、『新エロイズ』的状况を緻密に再構築したり、忠実に再現したりすることによって、『新エロイズ』が体现する感受性、急進主義、フランス革命を熱狂的に擁護した。一方、保守主義小説は『新エロイズ』的枠組みを意図的に逆転・転覆させることによって、『新エロイズ』の担っている政治的見解を嘲笑し、反駁し、諷刺し、攻撃した。換言すれば、1790年代、1800年代の小説は、自己の所属する思想陣営にふさわしい『新エロイズ』的変奏曲をひたすら奏で続けていたのだ。

第三章 思想の戦い、覇権の争い——マライア・エッジワス、『ベリンダ』(1801)——

第三章では、マライア・エッジワス(Maria Edgeworth)の風俗小説『ベリンダ』(Belinda, 1801)を取り上げる。『ベリンダ』は保守主義小説らしく、ルソーを批判・揶揄するエピソードに満ちている。しかし、それと同時に、自らのルソー批判・攻撃という表向き掲げる主張を相殺し、切り崩しをかける要素も潜んでいる。要するに、『ベリンダ』にはルソー的なものと反ルソー的なものが共存している。結局、マライア・エッジワスは『ベリンダ』の中で、ルソーの主張を一応否定しているにもかかわらず、ルソーの主義主張に抗いがたいある種の魅力を感じていた。そこで、『ベリンダ』において、ルソー的なものと反ルソー的なものの思想の戦いがおこなわれ、テリー・イーグルトン(Terry Eagleton)の言葉を借用すれば、相対立する思想が「作品の中で覇権を競い合い」、自己分裂をきたしてしまったと言える。その結果、『ベリンダ』は保守主義者をも急進主義者をも満足させることのできない、曖昧で不調和な作品になってしまった。

第四章 英国の庭に現れた蛇のジュリ——マライア・エッジワス、『リーアノーラ』(1806)——

第四章では、第三章に引き続いて、マライア・エッジワスの作品を取りあげる。第三章では、『ベリンダ』におけるルソー批判が、マライア・エッジワスの迷い・躊躇から曖昧なものになってしまったことを述べた。本章で取り上げた彼女の三番目の長編小説『リーアノーラ』(Leonora, 1806)においては、マライア・エッジワスはいささかの躊躇もせずに、徹底的に『新エロイズ』の批判・攻撃をおこなっている。マライア・エッジワスは急進主義思想と『新エロイズ』的状况を体现するレディ・オリヴィア(Lady Olivia)を悪女として描き、彼女を敗走・転覆させることによって、急進主義思想の敗北・頓挫を示唆した。さらには、当時の英国社会を具現化するL家がレディ・オリヴィアの策略による崩壊からかろうじて免れたことを示すことにより、フランスの革命政府の脅威から危ういところで逃れた当時の英国社会の状況を象徴的に提示しようとした。要するに、『リーアノーラ』の主題、構造は『新エロイズ』を意図的に逆転・転覆させたものであることを示した。

第五章 小説のジャンルの混在——エリザベス・ハミルトン、『現代の哲学者の思い出』(1800)——

本章では、エリザベス・ハミルトンの『現代の哲学者の思い出』(1800)を論ずる。『現代の哲学者の思い出』には、18世紀小説の主要なサブ・ジャンルである感傷小説、ピカレスク小説、女キホーテ小説、急進主義小説のパロディ、保守主義小説が混在している。各々のサブ・

ジャンルの中で、『新エロイズ』的状況が攻撃され、否定され、あるいは揶揄されることによって、多少きしみながら保守主義小説に収斂していくさまを跡付けた。より具体的に言えば、急進主義思想を揶揄・攻撃する完璧な保守主義小説であるヘンリ（Henry Sydney）とハリエット（Harriett Orwell）をめぐる物語に、感傷小説の枠組みをもったジュリア（Julia Delmond）の物語、ヴァラトン（Vallaton）を巡るピカレスクの物語、ブリジッティーナ（Bridgetina Botherim）を中心とする女キホーテの物語が流れ込んでいく。結局、感傷小説の女主人公で『新エロイズ』に魅せられたジュリアは、毒を呷って自殺未遂をはかったあと、衰弱して死にいたることによって悲劇的に敗北し、女キホーテ小説の、自己をジュリと同一視したブリジッティーナは、嘲笑されることにより、喜劇的に失墜し、ピカレスク小説のアンチ・ヒーローでルソー主義者のヴァラトンは、断頭台の露と消えることによって、滑稽にも破滅し、一方『新エロイズ』を批判する保守主義小説の主人公ヘンリとハリエットは、めでたく結婚し幸せになる。要するに、エリザベス・ハミルトンにとって、きわめて破壊的、破滅的と思われた急進主義思想は、並存する各サブ・ジャンルにおいて攻撃され、否定され、揶揄され、その結果、それぞれのサブ・ジャンルは、アラスター・ファウラー（Alastair Fowler）の言葉を借りれば、「変化し、合併し、再編成し直し」、多少きしみながら、保守主義小説に収斂していったのである。

第六章 夫と父の権威に逆らって——ジェイン・ウェスト、『不信心な父親』（1802）——

第六章では、ジェイン・ウェストの『不信心な父親』（*The Infidel Father*, 1802）を取り上げる。『不信心な父親』の中に、『エミール』で主張されている教育理論と『新エロイズ』を想起させるような物語が組み込まれていることを指摘し、かつ『新エロイズ』的状況や『エミール』で展開される教育理論が完膚無きまでに批判・攻撃されることによって、この作品がエドモンド・バークの伝統に連なる完璧な保守主義小説になっていることを指摘した。この小説において、ジェイン・ウェストはエドモンド・バークの手法をそのまま踏襲して、国家の転覆と家庭の崩壊を重ね合わせるという戦略をとった。急進主義思想に侵されながらも、健全で賢明な保守主義者たちによって、危ういところで救われたグランヴィル（Granville）家の姿を通して、急進主義思想の脅威にさらられながらもかろうじて、その危険を回避した当時の英国社会のありようをジェイン・ウェストは描こうとした。

第七章 四つの歪められた物語——イライザ・フェンウィック、『秘密』（1795）——

本章で論ずるのは、イライザ・フェンウィック（Eliza Fenwick）の急進主義小説『秘密』（*Secresy*, 1795）である。この作品には『エミール』、『新エロイズ』、ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832）の『若きウェルテルの悩み』（*Die Leiden des jungen Werthers*, 1774）、コデルロス・ド・ラクロ（Pierre Ambroise François Choderlos de Laclos, 1741-1803）の『危険な関係』（*Les Liaisons dangereuses*, 1782）の影響を色濃く漂わせている四つの物語が共存していることを指摘し、さらにそれぞれの物語が、ゴシック小説風の味付けをほどこされて急進主義小説に変貌していくさまを検証する。『秘密』は四つの物語の混成体であること、しかも共存する四つの物語は互いに対話することも、交差することもなく、ひたすら平行線を辿っている。各々の物語が辿る平行線は、登場人物の恋の行方にもそのまま反映されており、彼らの恋愛は、完全に一方通行で、結局、どの恋も報われず片思いのままで終わる。要するに、それぞれの物語

の主人公が次々と自分の物語を紡いで変貌を重ね、それぞれの物語は、ゴシック小説としてかろうじて収斂はしていくものの、最終的にはフェンウィックの政治的メッセージを伝えるべく、急進主義小説の色彩を濃厚に湛え、決して交わることなく終わる。

第八章 崇高なる感受性に殉じて——メアリ・ロビンソン、『不誠実な友人』(1799)——

第八章で取り上げるのは、メアリ・ロビンソン (Mary Robinson) の『不誠実な友人』(*The False Friend*, 1799) である。この作品は、ルソー流女子教育を受けた女主人公ガートルード (Gertrude St. Leger) が、『新エロイズ』のジュリと同じように、背徳を恐れず、自分の感性、情熱、欲望、衝動に忠実に、愛に生き、愛に殉じるさまを崇高に描いたものである。この小説には、18世紀小説に頻出する「若い娘が世の中に出る」と「主人公が女主人公の指導者であり恋人である」という二つのモチーフが使用されていることを指摘し、さらにこのモチーフの中に『新エロイズ』的状況の称賛、体制批判を巧みに織込むことによって、このモチーフにひねりが加えられていることを検証した。本書におけるメアリ・ロビンソンの意図は、単に、ルソー流女子教育を否定し、積極的に『新エロイズ』的状況にのめり込む恋する女性をただ称賛し、讃美することだけではなかった。メアリ・ロビンソンは、独立心溢れるガートルードに急進主義的見解を述べさせ、当時の家父長制社会の中枢にいる牧師、貴族、治安判事などの腐敗堕落ぶりを糾弾させ、女性の置かれている劣悪で隷属的で従属的な状況を指摘させることによって、間接的に体制批判を行おうとした。

第九章 誘惑する家庭教師——シドニー・オーエンソン、『セント・クレア』(1803)——

第九章では、シドニー・オーエンソンの『セント・クレア、またはデズモンドの女相続人』(*St. Clair; or, the Heiress of Desmond*, 1803) について論じる。この作品は家庭教師と准男爵の孫娘との崇高な恋愛を描いたものである。この小説が『新エロイズ』と『若きウェルテルの悩み』を下敷きにしていること、さらには主人公を高潔で魅力的な家庭教師として提示することによって、エドモンド・パークの描く侮蔑的な家庭教師像に反旗を翻していることを論じた。シドニー・オーエンソンは『セント・クレア』において、枠組みとして用いた『新エロイズ』と『若きウェルテルの悩み』という二つの急進主義的感傷小説を主人公のセント・クレア (St. Clair) と女主人公オリヴィア (Olivia Desmond) に小説中で熱狂的に是認、称賛させることによって、さらには家庭教師と彼の情熱的な恋愛をきわめて好意的に、読者の共感をよぶ形で、描くことによって、シドニー・オーエンソンなりの急進主義小説を構築した。

終章「ジュリアやらルイーザやら……」——ジェイン・オースティンの場合——

最終章では、第一章から第九章において概観した数多くのジュリアたちを念頭において、ジェイン・オースティン (Jane Austen) の小説に描かれた『新エロイズ』的状況を分析した。現実認識に長けていたジェイン・オースティンは、ソフィアやルイーザやジュリアという名前の女性を女主人公にして、彼女たちが大々的に活躍する物語を書きはしなかった。また、『新エロイズ』的状況、すなわちジュリアの活躍する物語を正面きって小説の中で描くこともしなかった。そのかわり、数多くのジュリアの物語からさりげない形で引用、盗用、借用し、吸収、歪曲、戯画化、変形させて彼女なりの物語を紡ぎだし、ジェイン・フェアファックス (Jane Fairfax)、アン・エリオット (Anne Eliot)、ソフィア・クロフト (Sophia Croft) という新し

いタイプの女性を生みだした。そしてジュリアたちの物語、『新エロイーズ』的状况を、単なる挿話、書簡の中での一挿話、劇中の物語、新聞記事、小説の表舞台に浮上して来ない舞台裏の物語、空想・妄想の産物、埋められた過去の物語として注意深く小説の周縁に追いやられ、囲い込み、封じ込めてしまった。

第一章から終章まで簡単に紹介したが、要するに本論の目的は、1790年代、1800年代の小説に、繰り返し幾度となく、意図的に抜け目なくなされる『新エロイーズ』に関するほのめかし、言及、引用、借用、『新エロイーズ』に描かれた状況、場面、光景の巧みな模倣、剽窃、盗用を指摘し分析することである。『新エロイーズ』はこの時代の数多くの小説の中で、書き換えられ、推敲され、磨きをかけられ、確認され、称賛され、あるいは反駁され、攻撃され、愚弄され、嘲笑され、戯画化された。いわば、この時代の小説は『新エロイーズ』からのおびただしい引用を散りばめることによって、『新エロイーズ』に対するある種の解釈、註釈をおこなっているとも言える。「どんなテキストもそれだけで単独には存在しないし、単独では充足しないし、それだけでは自立しない。どんなテキストも閉じられていたり、完全だったり、単一だったりしてほしい」とヴィンセント・リーチ (Vincent B. Leitch) がいみじくも指摘したように、ロマン主義時代の小説は互いに他の小説に対して開かれた存在であり、必然的に他の小説と交差している。リーチが述べた意味において、ロマン主義時代の小説はまさに『新エロイーズ』を媒介にして、「間テキスト的關係」を形成していると言えよう。

論文審査結果の要旨

本論文は、18世紀末から19世紀初頭のいわゆるロマン主義時代の英国小説について、ルソーの『新エロイーズ』に対する英国作家たち、特に女性作家たちの受容のあり方を通して検討し、当時の小説群の錯綜するテクストの中に浮かび上がる間テクスト的相関関係の見取り図を呈示しようと試みたものである。ルソーの影響は、論者が指摘するように、この時代の多くの小説に「ジュリア」という名前の女主人公が頻繁に登場することを見れば、きわめて広く深いものがあつたことは明らかである。しかしながら、このことに関して、詳細で具体的な研究が行われたことは英米においてもこれまでになかった。英国小説史の記述にあっては、ルソーの影響についてその事実を単純に認めただけでこの時代を素通りし、ウォルター・スコットやジェイン・オースティンの論考にただちに向かうというのが一般的であつたのである。

その第一の理由は、この時代の小説のほとんどが現代の読者の鑑賞に耐えない内容であるために、忘却され、関心を引くことが少ないことがあげられよう。一般に英国小説は、デフォーとリチャードソンによって創始されたジャンルであると考えられるが、この二人の他、ヘンリー・フィールディング、スターン、スモレット等が出た後は、19世紀初頭のスコットに至るまで、見るべき作品に乏しいとされている。いわゆるゴシック小説の他には、インチボルド、バーニー、エッジワスなどを少数の例外とすべきであろうが、彼女たちの小説はリチャードソンとスコットという巨峰の狭間にあっては、影の薄いものでしかないことは否定しがたい。

第二の理由としては、18世紀小説の主調である「センチメンタリズム」が、1770年代頃から変質したことがあげられる。センチメンタリズムは、商業資本主義の発達とそれに伴う市民(商

人)階級の急速な台頭とともに、18世紀文化に深く浸透することになった。この用語を文学史上の一時期にあてはめたのは後世の文学研究者であるが、「センチメント」や「センチメンタル」という語は、この時代の文学テキストでも既に重要なキーワードになっていた。センチメントが表す意味内容は、本来は17世紀プロテスタント神学者たちの思想に起源を持つものであり、理性・知性と深く関わる道徳的感受性とそれが生み出す思想や感情のことであった。「センチメント」と「美德」とは密接に関連する概念であり、人間の情動を倫理性と結合させたのである。センチメントを称揚する文学史上のセンチメンタリズムが支配的となったのは、前の時代、王政復古期における「ウィット」を中心とする主知的な傾向に対する反動でもあった。しかし、センチメンタリズムに対する肯定的な見方は1770年代頃に微妙に変化し、過度の感傷、情緒への耽溺などを指すようになる。現在の「センチメンタル」という言葉が持つ否定的な響きはこの頃からのものである。それでもなお、センチメンタリズムがその後約半世紀にわたって大きな文化的潮流であることには変わりなかった。ロマン主義時代の英国小説は、ヘンリー・マッケンジーの『感情の人』に代表されるように、ルソー派（急進主義）、反ルソー派（保守主義）を問わず、きわめてセンチメンタルな、すなわち広い意味で情動的、感傷的なものである。

しかしながら、論者が示しているように、この時代の小説は、その内在的価値についての判断を留保したとしても、興味深い文化的現象を表現していることは確かである。フランス革命に象徴されるような急進主義的思想が、英国において思想界のみならず一般社会を揺るがしていたことは周知の通りである。それを表現するテキストは、ワーズワス、コウルリッジ、シェリー等のロマン派の詩人の作品にとどまるものではなかった。小説は急進主義の浸透とそれに対する保守主義の抵抗・反撃の重要な媒体を提供したのである。しかも、この時代的小説は、その書き手も読み手も女性を中心であったことも注目すべき事実である。メアリ・ウルストンクラフト等の先駆的フェミニストが先導した急進主義は、特に女性にとって重要な問題を提起していた。抑圧からの解放、感情（恋愛）の自由と称揚は、イライザ・フェンウィック、メアリ・ロビンソン等の急進主義的小説を生み出し、一方では感情・衝動の抑制、理性・分別の称揚、既成秩序の擁護を唱えるパーク的保守主義に傾斜する多くの小説が、エリザベス・ハミルトン、ジェイン・ウェスト等の女性作家によって書かれたのである。そのような錯綜した文化的葛藤の場となった小説というジャンルにあって、ルソーの『新エロイズ』と『エミール』は基軸的テキストとして大きな存在感を持っている。

本論文は、ロマン主義時代の女性作家たちの作品を中心にルソーのテキストとの間テキストの相関関係ないし葛藤を、徹底的な一次資料分析を通して探求したものである。ここで扱われる小説の大部分は、エッジワスなどごく少数を例外として、ほとんど忘れられた存在である。論者はそれらの小説をルソーとの関連において再考し、対立するイデオロギーが葛藤を繰り広げる場であることを明らかにしていく。

第一章では、急進主義小説においても、保守主義小説においても、ルソーの『新エロイズ』は、論者によれば、「ある種の記号」として機能していることが検証される。ルソーのヒロインに倣ってしばしばジュリアと呼ばれるヒロインの行動について、最終的に肯定的態度が示されるか否定的態度が示されるかによって、急進主義と保守主義を識別することが可能なのである。このことは、第二章に論じられるように、ヘレン・マライア・ウィリアムズの『ジュリア』、シャーロット・スミスの『デズモンド』、ジェイン・ウェストの『現代の物語』、チャールズ・ロイドの『エドモンド・オリヴァー』等、当時の小説に「知的・思想的枠組みを提供」

していたことを意味する。これらの小説は、この枠組みの中で、保守主義あるいは急進主義というようにベクトルの方向を変化させながら展開するものとして明瞭な位置づけを与えられることになる。小説テキストはルソーのテキストを中心とするイデオロギーのせめぎ合いの場なのであり、そのような理解の下で、それぞれの作家・作品の中での個別の問題が浮き彫りにされるのである。第三章と第四章では、当時の重要な女性作家マライア・エッジワスの作品が、この枠組みの中で検討されている。エッジワスの『ペリンダ』では、ルソー的志向と反ルソー的志向とが「思想の戦い」を繰り広げる結果、自己分裂をきたして、曖昧な作品となる過程が分析され、一方、『リーアノーラ』は、ルソーの『新エロイズ』を「逆転・転覆」させた保守主義小説となっていることが立証される。エッジワスの作品の思想的変遷が、フランスとの国際関係の緊迫を背景とすることも論じられている。ルソーの思想はフランス革命と同一視され、家庭への脅威、家庭の崩壊は、イギリス国家への脅威であり、その崩壊に結びつくものとみなされるのである。男女の恋愛を主軸とする小説が高度に政治的な意義を備えていたことが明らかにされている。

第五章と第六章では代表的な保守主義女性作家の作品が検討の対象となる。エリザベス・ハミルトンの保守主義小説『現代の哲学者の思い出』には、18世紀小説を形成してきたさまざまなサブ・ジャンルである感傷小説、ピカレスク小説、「女キホーテ」小説、急進主義小説と保守主義小説が混在している。それらはせめぎ合いを繰り返しながら、最終的には保守派の政治的メッセージを伝える保守主義小説に収斂するのである。ジェイン・ウェストの『不信心な父親』では、『新エロイズ』や『エミール』で展開されたルソー的思想が徹底的に批判・攻撃の対象となり、完璧なバーク的保守主義小説が成立している。

第七章、第八章、第九章では急進主義の女性作家たち、イライザ・フェンウィック、メアリ・ロビンソン及びシドニー・オーエンソンが取り上げられている。フェンウィックの『秘密』では、ルソーのテキストをはじめ、ゲーテの『若きウェルテルの悩み』とラクロの『危険な関係』等の影響を色濃く受けた四つの物語が共存し、それらの物語の間テキスト的絡み合いを通じて、ゴシック小説的要素を加味した急進主義小説に変貌する過程が見られる。ロビンソンの『不誠実な友人』では、18世紀小説に頻出する「若い娘が世の中に出る」と「主人公が女主人公の指導者であり恋人である」という基本的な二つのモチーフが、ルソーのテキストの影響によって微妙に変容している。一方、オーエンソンの『セント・クレア』では、ルソーとゲーテのテキストを下敷きとして、バークによる侮辱的な家庭教師像を転覆する間テキスト的戦略によって、急進主義的小説が構築される。

終章で扱われるジェイン・オースティンが保守主義的小説家であることは、一般に認められている前提である。本論文でのここに至るまでの過程で論じられてきたことを基礎として再検討するならば、オースティンがルソーのテキストを単なる挿話や劇中の物語、間接的に語られる舞台裏の物語等として周縁に追いや、「囲い込み、封じ込めた」ことの意義が明確に浮かび上がる。彼女の小説は英国小説史における保守派の優位を確立したものであるが、同時にルソー的センチメンタリズムを超克することによりロマン主義をも越えた独自の小説世界を構築したのであった。

本論文では18世紀小説の背景であるセンチメンタリズムについて、その思想的・歴史的背景の追求がなされていないのであるが、すでにブリッセンデン等による十分な考察が行われているという前提に立つてのことであろう。しかしながら、本論文における小説テキスト分析に

よって、センチメンタリズムの複雑に錯綜した実態の解明に成功した結果、それを基盤としてその思想的・社会的背景について新たな知見を提供しうる可能性が開かれている。また、ジェイン・オースティンが、単なる保守主義小説の枠を越えて、急進派、保守派を問わず支配的であった感傷主義そのものを超越したことの意義を追求することも要請されることになったと言えよう。こうしたところまで踏み込んでいれば一層充実した論考となったであろうが、しかし、それは論者の今後の課題となるべきものであるとも言える。本論文は、膨大な数の一次資料、しかも現在では入手困難な当時の群小小説群を綿密に読み解き、その確固たる裏付けの下に、ロマン主義時代における急進主義小説と保守主義小説の間テクスト的相関関係と葛藤を余すところなく解明した。これはきわめて印象的な成果であり、英国小説研究史上の重大な欠落を補って余りある内容である。小説史の書きかえの可能性すら呈示し得たことには大きな意義がある。

よって、本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。